

近世後期における「のだ」文の実態について

趙 宏

一 はじめに

本稿は近世後期における「のだ」文の実態を研究の対象とするものである。現代日本語の「のだ」は文中での機能と実態について、奥田靖雄(1984)^①、益岡隆志・田窪行則(1989)^②、野田春美(1997)^③などはすでにさまざまな角度から論考をなされ、大きな業績をあげた。かれらの研究成果によって、「のだ」の様相が明らかにされた。すなわち、「のだ」という表現の位置付けは準体助詞「の」に判断の助動詞「だ」の付いたもので、もう一語化され、文末にくると、その文は「説明」「判断」「命令」などとして働くという見方はすでに定着していると言える。

その一方、明治以前の「のだ」文についての研究が少ない。管見に触れる限り、木坂基(1973)^④、土屋信一(1987)^⑤、福田嘉一郎(1997)^⑥などの論文には「のだ」に対する言及が見られるに止まる。

木坂基は「江戸末期までには「のだ」「のである」とも一般化しつつあったことが明らかにされている。」と述べた。

土屋信一は「のだ」文は「格助詞「の」から体言相当の機能を有する準体助詞「の」が発生するとともに発生した」と主張した。また、土屋氏は「浮世風呂」「浮世床」を調査して、現代語と異なる「のだ」の意味用法があると指摘してある。

福田嘉一郎は「現代語のノダは、連体ナリとかかわりなく、準体助詞ノが成立したのちに新しく生まれた形式である。中世語のモノチャのなかには、現代語ノダに相当すると見られるものがある」と強調した。

かれらの研究からいろいろな示唆を得て、「のだ」の変遷が多少分かってきたが、明治以前の「のだ」文の実態がいまだ不明であることも事実である。

本稿は明治以前の「のだ」文のすべてにわたって網羅的に詳しく見ていくことはとうてい不可能である。よって、その一部分を中心にして、研究範囲を近世後期に限定する。つまり、宝暦から天保年間までの「のだ」文を研究対象とする。この時期、洒落本、黄表紙、滑稽本や人情本などの資料が豊富に出揃って、数多くの用例を採集することが可能になり、「のだ」の実態を明らかにすることができると予測する。「のだ」は文中でどんな位置付けを持っているのか、どのような意味を表すのか、どんな推移をたどっているのか、いつごろから定着の相を呈すのか、これらの問題に焦点を当てて、考察を進めて、近世後期における「のだ」文の実態をとらえてみたいと思う。

二 調査資料

今回は調査資料として、次のものを選んだ。作品時期、ジャンル、作品名、作者などは表1に示したとおりである。

表1

作品番号	西暦	和暦	ジャンル	作 品	作 者
1	1770	明和7	洒落本	遊子方言	田舎老人多田爺
2	1770	明和7	洒落本	辰巳之園	夢中散人寝言先生
3	1775	安永4	洒落本	甲駅新話	大田南畝
4	1775	安永4	黄表紙	金々先生栄華夢	恋川春町
5	1776	安永5	黄表紙	高漫齋行脚日記	恋川春町
6	1779	安永8	洒落本	軽井茶話道中粹語録	山手馬鹿人
7	1781	天明元	黄表紙	栄花程五十年蕎麦伍五十年 見徳一炊夢	朋誠堂喜三二
8	1782	天明2	黄表紙	手前勝手御存商売物	北尾政演
9	1783	天明3	洒落本	卯地臭意	鐘木庵主人
10	1785	天明5	黄表紙	御手料理御知而已 大悲干禄本	芝全交
11	1785	天明5	黄表紙	江戸生艶氣樺焼	山東京伝
12	1787	天明7	洒落本	通言総籙	山東京伝
13	1788	天明8	黄表紙	文武二道万石通	朋誠堂喜三二
14	1789	寛政元	黄表紙	孔子縞子時藍染	山東京伝

15	1790	寛政 2	黄表紙	大極上請合売心学早染艸	山東京伝
16	1790	寛政 2	洒落本	傾城買四十八手	山東京伝
17	1791	寛政 3	洒落本	青楼昼之世界錦之裏	山東京伝
18	1795	寛政 7	黄表紙	敵討義女英	南仙笑楚満人
19	1798	寛政 10	洒落本	傾城買二筋道	梅暮里谷峨
20	1804	享和 2	滑稽本	東海道中膝栗毛	十返舎一九
21	1806	文化 3	滑稽本	酩酊気質	式亭三馬
22	1809	文化 6	滑稽本	浮世風呂	式亭三馬
23	1812	文化 9	滑稽本	浮世床	式亭三馬
24	1820	文政 3	滑稽本	花暦八笑人	滝亭鯉丈
25	1832	天保 3	人情本	春色梅児譽美	為永春水
26	1833	天保 4	人情本	春色辰巳園	為永春水
27	1837	天保 8	人情本	春告鳥	為永春水

全部で 27 作品である。その内訳は洒落本が 9 作品、黄表紙が 10 作品、滑稽本が 5 作品、人情本が 3 作品である。

これらの資料を研究対象として選んだのはこれらは宝暦以降、天保年間までの約 60 年間の江戸の戯作であり、読者の好尚と時代世相、流行を反映する形で生み出され、ほぼ各時代の代表的な作品である。

作品資料「甲駅新話」「酩酊気質」「春告鳥」は日本古典文学全集（小学館）を使った。「花暦八笑人」は有朋堂文庫によった。そのほかの資料は日本古典文学大系（岩波書店）を使った。

三 「のだ」文の成立に関する考察

明和安永期から天保期までの「のだ」文および「のだ」のほかの形の使用状況について調査をした。（表 2・表 3）に示したとおりである。（空欄は 0 例を示す。）

表 2

作品 番号	和 暦	のだ	のじゃ	のだろ う のだら ふ	の か	の さ	のじゃ ござり やせん	のぢ アね のじゃ アね のじゃ ない	の で は な い	のじゃ ごせん せん	のじゃ ござん しやう	の で ご ぎ る
1	明和 7		1									
2	明和 7	1					1	1	1			
3	安永 4	1			3	3				1		
4	安永 4											
5	安永 5											
6	安永 8				1			1	1			
7	天明元					1						
8	天明 2					1						
9	天明 3	8			1			1				
10	天明 5								1			
11	天明 5											
12	天明 7	4		1								
13	天明 8				1	1						
14	寛政元											
15	寛政 2											
16	寛政 2				2	2		1			1	
17	寛政 3	1										
18	寛政 7											
19	寛政 10				5	4						
20	享和 2	34	22	4	14	4		5				1
21	文化 3	2	2			4						
22	文化 6	25	2		2	53		1	1			
23	文化 9	37	2		3	38		1				
24	文政 3	83		7	20	3		3	2			
25	天保 3	40			21	7		2	1			
26	天保 4	39				15		3	1			
27	天保 8	49			30	1		1	2			

表3 (表2の続き)

作品番号	和 暦	の で ご ざ り ま せ ぬ	の で ご ざ り ま す	の で ご ざ り ま す	の で あ っ た	の で あ り ま す	の で ご ざ り ま せ ん か	の じ ゃ ご ざ い ま せ ん	の で は あ り ま せ ん	の で ご ざ い ま せ ん	の で ご ざ い ま す
1	明和7										
2	明和7										
3	安永4										
4	安永4										
5	安永5										
6	安永8										
7	天明元										
8	天明2										
9	天明3										
10	天明5										
11	天明5										
12	天明7										
13	天明8										
14	寛政元										
15	寛政2										
16	寛政2										
17	寛政3										
18	寛政7										
19	寛政10										
20	享和2	1	1	3	1						
21	文化3	1									
22	文化6										
23	文化9										
24	文政3										1
25	天保3					2					1
26	天保4						1				
27	天保8							1	1	2	

考察結果

- 1 今回調査された資料からみれば「のじゃ」は明和7年から寛政10年までは「遊子方言」の1例しか出てこない。享和2年から文化9年は「のじゃ」が見られるがその数は多くない。全部で28用例である。文政、天保時期は「のじゃ」が見られないがこの時期使用されていなかったとは言えない、ただ4作品だけの調査だからである。いずれにしても、その流れを見て、すぐわかるように「のじゃ」は「のだ」に比べて、数が少なく、あまり使われないことがわかった。
- 2 明和7年から寛政10年にかけて、「のだ」が見られるが数は多くない。異形態（「のだ」のほかの形「のじゃ」「のだろう・のだらふ」「のか」「のさ」「のではない」など）もそれほど見られない。
- 3 享和2年から文化9年にかけて、「のだ」及びその異形態が前の時代より多くなった。
- 4 文政、天保時期、「のだ」が前の時代よりかなり多くみられ、異形態もさまざまな形でみることができる。江戸語の完成された姿を見せている。
- 5 「のだ」の異形態はほぼ出てきたが「のです」という表現は資料に見出せないようである。「浮世風呂」には判定の助動詞「だ」の丁寧体としての「です」が見られる。

例(1) 是すなはち物を食てすぐに吐くものです。(浮世風呂, 66頁, 16行)

「です」は現代語ではきわめて普通の語であるが、近世後期において、その用例数が非常にすくない。そして特別の人に使われる言葉である。例(1)の話手は医者である。
- 6 「のだった」という表現も資料にみられない。「のだった」は現在では書き言葉として主に使われるが今回の資料は会話を中心としているため「のだった」が出てこないかもしれない。「のであった」は「東海道中膝栗毛」にはみられるから「のだった」が存在した可能性があると思う。

(2) 北八「イヤほんに、木でこしらへたのであった。どうりでかたい(東海道中膝栗毛, 174頁, 12行)
- 7 現代語に見られない形「のだによって」「のだものを」「お出のだ」が出てきた。

(3) そして、いけむこたア大毒だといふこつたから、ひとりでに出てくる

時節を待てゐるのだによつて、すこしひまがいる。(東海道中膝栗毛, 439頁, 7行)

(4) 竹「そりやア其筈さ死霊がのり移るのだものを (浮世床, 332頁, 9行)

(5) よね「それじゃアお長さんは今ではどうしてお出のだへ (春色梅児譽美, 98頁, 10行)

多くの近世小説の中から、わずか27作品を調査した結果であるから、「のだ」の実態について、決定的なことはもちろん言えない。しかしながら、「のだ」文の使用度数には一つの流れが見られる。すなわち、明和安永期から寛政期までは「のだ」文の使用度数は低い。享和期から天保期にかけて、明確に「のだ」文の使用度数は高い。また文化期から「のだ」の異形態「のじゃ・のだらう・のだらふ・のか・のさ・のじゃござりやせん・のぢゃアねへ・のじゃアねへ・のじゃない・のではない・のじゃござんせん・のじゃござんしゃう・のでござる・のでござりませぬ・のでござりやす・のでござります・のであつた・のであります・のでござりませんか・のじゃございませぬ・ではありません・のでございませぬ・のでございます」など多様性を見ることができる。「のだ」という表現も人々に広く使われたことがわかる。江戸語の完成にしたがって「のだ」も多用されてきた。「のじゃ」の衰退、「のだ」の定着は文化後期にほぼ完了していると言ふことができる。

四 「のだ」の意味に関する考察

まず準体助詞「の」が判定の助動詞「だ」と結びついて一語化した「のだ」について先行研究によって試みられている現代語の意味用法の分類を参考にしながら、今回扱った資料の用例を分類していく。

現代日本語の「のだ」文について、さまざまな研究が行われている。「のだ」の意味用法は、次のように説明されている。

- 国立国語研究所⁷⁾ (1951) に「のだ」は、「根拠のある説明, 理由の提出, 回想, 二重判断, 強調などを表す。」と記された。
- 佐治圭三 (1972)⁸⁾ 「のだ」は当為, 詠嘆の意味を表わすことができると述

べた。

- 吉田茂晃 (1988)⁹⁾ は「「のだ」は文内で強調、決意、命令、確認、換言、告白、教示を表す。」と指摘した。
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) に次の記述がある。
「「のだ」は、ある事態に対する事情・背景の説明を述べる形式である。
「「のだ」」「「のではない」」は、ある特定の状況において、望ましい、望ましくない動作をのべる。したがって、強く口調で述べれば、それぞれ、命令、禁止に近い言い方にある。
- 国広哲弥 (1992)¹⁰⁾ は次の分類をした。
「「のだ」は「「スコープ」」「「理由、原因=説明」」「「習慣、風習」」「「予定」」「「予測」」「「決心」」「「一般的真理」」「「真理、正解の発見」」「「納得、あきらめ」」「「確認」」「「強調、決心の再説」」「「柔らかい断わり」」「「難詰」」「「助言」」「「命令」」「「完了」」「「回顧」」などの意味を表す。

以上の示した分類を総合的に考えて、整理して、研究対象資料の用例を分類してみた。「「のだ」」の異形態と「「のじゃ」」は今回考察の対象外にする。次は資料の用例である。

- 説明の「「のだ」」(113例)
例(1) やどの女房あはて々「「ばあチャこゝへはどふしてすつぼんがきたやア北八「ハ、アひるまのすつぼんが、つとの中からはい出たの「のだ」な」(東海道中膝栗毛, 97頁, 6行)
- 理由の提出の「「のだ」」(23例)
(2) 「「さやうさ、女の子一人で宅を出たの「のだ」から、案じるとわるいからはやく帰しやせう。」(春色梅児譽美, 100頁, 13行)
- 決意の「「のだ」」(14例)
(3) 北八「「エ、くすりをのむの「のだ」へ。コリヤたまらなくなつた。」(東海道中膝栗毛, 208頁, 11行)
- 詠嘆の「「のだ」」(10例)
(4) 染「「アレサ、そふしてお出ヨ。誠にたいそう塩梅がわるいの「のだ」ネへ。」(春色辰巳園, 410頁, 4行)

● 強調の「のだ」(5例)

(5) 世が世なればこそ、おれが居てやるのだ。(浮世床, 308頁, 16行)

● 命令の「のだ」(5例)

(6) ト少しかんがへて、ヲ、それ、ふくい町の豊国が所から人がきたら、
わすれずに此ぢうのやしきのを、二分やるのだよ。(通言総籙, 368頁, 15
行)

● 確認の「のだ」(2例)

(7) あれはたしか、かごをかき習ふのだ。(通言総籙, 369頁, 14行)

● 疑問詞を伴う「のだ」(146例)

(8) よね「若旦那へなぜそんなに悲しいことをお言なさるのだエ(春色梅児
譽美, 52頁, 2行)

● その他：現代語の「のだ」と違う意味をもつもの。(34例)

(9) のろ「これ謹んできくがいに、是が万葉振といふ古往の口調を借りたの
のだ」(花暦八笑人, 230頁, 3行)

その中の「のだ」は「歌だ」の意である。

考察結果

- 1 近世後期には、大部分の「のだ」の意味用法が現代語と同じ機能をもって
いた。
- 2 疑問詞を伴う「のだ」が他に抜きんで多い。全352例中146例である。
その時期、「のか」「のだか」の方が自然に思われるが、近世において、
「のか」「のだか」という表現は存在しているにもかかわらず、「のだ」が
一般に用いられている。また、「のだ」は「どふして」「なぜ」「なにを」
などの疑問の言葉と伴って用いられる例が多い。話し手の質問、難詰を表
わしている。
- 3 説明の「のだ」は理由、根拠を示す「から」と相伴して、「～から～のだ」
というように用いられる例が多く見られる。全352例中36例である。
例(1) 手めへ紺のかんばんをきているから、それでみんなにひやかされる
のだハ(東海道中膝栗毛, 384頁, 16行)
例(2) おらが伯母御などは、不仕合で独身になつ居るから、おれがはごく
むのだ。(浮世床, 311頁, 12行)

- 4 上に述べたように、近世後期の「のだ」文の大部分は現代語と同じ機能を持っているが、しかし、現代語の感覚で説明しきれない「のだ」文がある。これについて、土屋信一(1987)は「浮世風呂」「浮世床」の「のだ」文の意味を考察した。土屋信一の取り上げた現代語と異なる18例の分析に十分に首肯できるが紙面の都合でここで紹介しないことにする。(詳しくは土屋信一「浮世風呂・浮世床の「のだ」文」を参照されたい。)その他の「浮世風呂」「浮世床」以外の資料で気が付いた点、現代語とは微妙に異なる意味を持つのをすべてとりあげる。

例(1) ナニサ、あれはおみやげになさるのだ(甲斐新話, 81頁, 12行)

その中の「あれ」は谷粹の持ってきた風車をさすが、「のだ」は「ものだ」の意である。

(2) 「是がほんの穴へはまつたといふのだ。あなにくやゝ。(文武二道万石通, 162頁, 8行)

「のだ」は「ことだ」の意である。女にだまされたことを指す。

(3) ヲヤ、むなさん、神さまへあげるのだ。(東海道中膝栗毛, 63頁, 5行)

「のだ」は「物だ」の意である。

(4) なんでもまけたものが、おぶってわたるのだがよしか(東海道中膝栗毛, 158頁, 5行)

「のだ」は「やり方だ」の意である

(5) 北八「なんだ、コリヤ、ばかのむきみをすしにつけたのだな(東海道中膝栗毛, 362頁, 10行)

「のだ」は「物だ」の意である。

(6) 野呂「それがマアどうしたといふのだ」(花暦八笑人, 34頁, 5行)

「のだ」は「ことだ」の意である。

(7) のろ「そしておしゃべりも出来ず、ア、かわへさうだナ。是がほんの舌喰みじめといふのだ」(花暦八笑人, 61頁, 14行)

「のだ」は「ことだ」の意である。

(8) 其息子がどうしたといふのだ」(花暦八笑人, 65頁, 5行)

「のだ」は「やつだ」の意である。

(9) フンそこでまづみやびた言葉といふは、どういふ人の遣ふのだ」

(花暦八笑人, 156 頁, 5 行)

「のだ」は「言葉だ」の意である。

- (10) わたしは大はだぬぎ, 向鉢巻のやけ踊となるといふのだ (花暦八笑人, 166 頁, 4 行)

「のだ」は「人だ」の意である。

- (11) 金持の旦那をおもしろく遊ばせてやる座持といふのだ (花暦八笑人, 223 頁, 6 行)

「のだ」は「太鼓持だ」の意である。

- (12) あば「二種とは二色といふ事だア。二色と云つたら文盲な主達ゆゑ、役者の口真似する事だとおもふだらうが、二品といふのだぜ」(花暦八笑人, 224 頁, 8 行)

「のだ」は「ことだ」の意である。

- (13) のろ「これ謹んできくがいゝ, 是が萬葉振といふ古往の口調を借りたのだ」(花暦八笑人, 230 頁, 3 行)

「のだ」は「歌だ」の意である。

- (14) 鳥「ハテナそれぢゃアおみらのことを知つて居るのだ」(春告鳥, 394 頁, 11 行)

「のだ」は「わけだ」の意である。

- (15) 旦那さんへ面あてらしく, 自害するの身を投るのといふ事は仕ませんヨと申したら, 則命が惜しいのだと言って思入私をじらさして, それから終に, 其様な馬鹿なことをいふものぢゃねへ (春告鳥, 526 頁, 17 行)

「のだ」は「ものだ」の意である。

- (16) そして好な玉子蒸の中へ突込で食といふのが極美味のだ。(春告鳥, 529 頁, 8 行)

「のだ」は「ことだ」の意である。

この 16 例の中で体言の代用として使われた「の」に「だ」の付いたものが多い。「ものだ」「わけだ」「ことだ」などの意として理解していいものも見られる。

五 結び

以上のように、本稿の考察によって、近世後期における「のだ」文の実態がすこしでも明らかにされた。すなわち、「のだ」文の定着は文化期にほぼ完了している。隆盛になったのは文政、天保期であることが判明された。また、表2・表3を見ると、「のだ」文の推移のプロセスもはっきり見えるだろう。江戸時代の末期には人々にひろく使われたことも考えられる。今回は近世後期の「のだ」について、できるだけ用例を集めて、その意味を検討してみたが、「のだ」の意味用法について大部分は今と同じ機能をもっているが、異なる意味をもつものも見られる。「のだ」を含む文は近世語でも現代語と同じように先行する文のコンテクストを受ける。その文一つだけを切り離しては意味がとれない。「のだ」の意味用法は複雑極まるものであって、微妙なものが多い。本稿ではただごく狭い範囲で「のだ」文について考察を行ったが、まだ言及しきれないものが少なからずあると思うが、今後もっと資料を集めて考察を進めたい。

-
- (1) 奥田靖雄 (1984)「おしはかり (一)」『日本語学』3巻12号 54頁。
 - (2) 益岡隆志・田窪行則 (1989)『日本語の文法の研究』くろしお出版。両氏は「のだ」は、自分の感覚、推測による判断、直感的な判断、等に基づく説明あるいは、後で判明した別の事実であってもよい。確信の度合を示す陳述の副詞「きっと」「たぶん」等と共に使われることもあると指摘した。
 - (3) 野田春美『の(だ)の機能』(1997年くろしお出版・12頁)参照。
 - (4) 木坂基 (1973)「近代文章における「のだ」文の変遷と表現価値」新居浜工業高等専門学校
 - (5) 土屋信一 (1987)「浮世風呂・浮世味の「のだ」の文」『近代語研究 第七集』武蔵野書院。
 - (6) 福田嘉一郎 (1997)「説明の文法的形式の歴史について—連体ナリとノダー」『国語国文第六十七巻第二号』
 - (7) 国立国語研究所 (1951)『現代語の助詞・助動詞』
 - (8) 佐治圭三 (1972)『日本語の文法の研究』ひつじ書房
 - (9) 吉田茂晃 (1988)「ノダ形式の連文的側面」『国文学研究ノート』21
 - (10) 国広哲弥 (1992)「「のだ」から「のに」・「ので」へ—「の」の共通性—」(日本語研究と日本語教育)名古屋大学出版